

『日葡辞書』⁽¹⁾が語る衣の風景

林 文 子

1. はじめに

着衣は、生活の根幹であるばかりでなく、生産や技術の程度を端的に示し、背景にある流通、さらには労働の形態をも示す。それだけでなく、当該の衣服を身に付ける者の社会的な位置、身分をも標識し、アイデンティティの形成に大きな役割を果たすものである。何をどのように着るかという点において、個人的な嗜好が占める割合は時代によって大きく異なる。着衣は、社会と地域と時代によって大きく規定される文化である。

さて、他の地域から訪れた他者の眼差しは、当該地域で共有してきた当たり前の日常に、未知なモノや新奇なコトとしての輪郭を与え、浮かび上がらせることができるといえよう。中でも来日したイエズス会宣教師⁽²⁾アレシャンドゥロ・ヴァリニャーノ⁽³⁾によって「日本は、ヨーロッパとは全く反対に走っている世界である…すべてのことにおいて言語に絶し理解し得ないほど相違は大きく、正反対である⁽⁴⁾」と断言された16世紀末の日本の状況は、宣教師たちの記録によって、その輪郭を一層明瞭にしたといえる。

ヨーロッパ人という他者にとって、着衣とは、特定の着衣の文化を共有する社会集団との距離を保持できれば強制されるものではなく、価値観の差異として、違和感のみで看過しうる。「我等が美しいと思うもの、我等の眼によく見える色彩を一般に彼等は喜ばない。彼等の目を楽しませるものは我等には価値がない⁽⁵⁾」としても、最終的には「きわめて清潔であり、美しく調和が保たれており⁽⁶⁾」と観察者としての視線で棚上げできるのである。

しかし、イエズス会宣教師という布教者にとって、着衣の文化に対して目を背けることなく、馴致していく必要があった。「彼等の食事、饗応、娯楽、儀礼に接し、これらを堪え忍ぶことは、我等にとってこれほどの苦痛や苦行はなかったと言わねばならぬほどであり、我等イエズス会を統轄するに際しては、日本人の風習に順応させる事以上に困難なことはないと思われる。従来はこの点で多く欠けたところがあった為に、大きい成果を失ったのである⁽⁷⁾」との反省に立つ宣教師たちにとって、その順応は試練であり、また使命でもあった。

それでは、宣教師たちが「至上の困難、最大の苦痛を伴って堪え忍んだ」現実とはどの

『日葡辞書』が語る衣の風景

ようなものだったのか。

ポルトガル人宣教師たちの手になる『日葡辞書』に収録された3万余語はきわめて断片的であり、ある種曖昧で限定的である。読み方が示されていることで、国語学の基本史料と位置付けられてきたが、百科事典のように語意が全て明示されている訳ではなく、およその品名の分類にすぎない記述も多いことから、歴史的な史料としては等閑視されてきた。しかしながら、布教の前提としての語彙の実用性・汎用性は必須のものであり、実際の見聞から得られたという意味で、着衣の故実や伝統の概念から解放された、その時空間の現実を切り取ることができる。『日葡辞書』から衣服に関する語彙を抽出して整理することは、単なる衣類の羅列に止まらず、16世紀末の日本に展開した衣の風景を再構築するために有効だと考える。

本稿では、『日葡辞書』⁽⁸⁾を軸に、天正13年(1585)宣教師ルイス・フロイス⁽⁹⁾によって著わされた『日欧文化比較』⁽¹⁰⁾をあわせながら、着衣の文化の一齣をたどりたい。

わたしたちを取り巻く環境のうち、400余年でもっとも変貌を遂げたものが衣類である。昨今次々に産み出される化学繊維などの普及で素材も多岐にわたり、生産や流通のシステムが変化し、安価で多種類の衣類が容易に選択・入手できるようになった。生活様式や生活空間の変容に伴った機能性が求められ、社会構造の変化に従って、身分等を標章していたモノがほとんど姿を消し、「和服」を着る機会も著しく減少した。「和服」における規範や作法も緩やかになり、嗜好や自己表現としてのデザインが重視されるようになった。このように過去と共有するものが極めて限られている現在、わたしたちもまた過去に對して、異世界から他者の眼差しを投げかけているのに外ならない。言い換えれば、規範や作法、嗜みの意識から解放された現在こそ、着衣の文化を対象化できることばを持つともいえよう。

2. 宣教師のまなざし

●身体が丸見えの薄衣

まず、宣教師たちの耳目を驚かせたのは、「衣更^{ころもが}へ⁽¹¹⁾」の時期になると夏だからという理由で、人々が男も女も一斉に、ほとんど全身が透けて見える程の薄い「帷子^{かたびら}」を着たことである。夏でも冬でも身体が見えるほど薄い衣服を着用する習慣のない⁽¹²⁾ヨーロッパ人にとっては、これこそ不面目⁽¹³⁾極まりないものであった。さらに、礼節を重んじ、人々の善き模範となるべきヨーロッパの僧・宣教師たちにとって、世間⁽¹⁴⁾と一線を画し、聖職者として同じ役割を担っている筈の、日本の坊主らが薄い帷子を着け、誰もそれを恥ともしないし、不面目とも感じていない⁽¹⁵⁾ことは、坊主らへの不信を一層倍加した。

男の衣服と女の衣服とが明確に異なるヨーロッパに對して、日本では、中央部が開き、

前裾が少し短く⁽¹⁶⁾仕立てられた⁽¹⁷⁾小袖⁽¹⁸⁾と帷子⁽¹⁹⁾は男にも女にも等しく用いられた⁽²⁰⁾。

帷子の下が素裸だったわけではない⁽²¹⁾が、下着の役割を果たした帷子⁽²²⁾もあった。部屋着としては帷子の上に短めのガウン「胴服⁽²³⁾」を重ねたが、戸外では、男は着物もしくは帷子の上に、前の開いた、彩色を施した、きわめてうすいサンベニトを着ける⁽²⁴⁾とあり、帷子に「肩衣⁽²⁵⁾」と木綿・麻製で両脇の開いた「袴⁽²⁶⁾」を重ねた姿、女は衣服の前が足の甲まで開いている⁽²⁷⁾という表現から、帷子に「帯⁽²⁸⁾」を締め、帷子を転用した「被衣⁽²⁹⁾」という⁽³⁰⁾マント⁽³⁰⁾を頭から被った姿がうかがえる。

●すっかり露わになった肌

次いで、宣教師の目は薄衣だけでなく、貴賤を問わず、一年の大半素足で歩き⁽³¹⁾、胸や腕を露出する⁽³²⁾女性、常に足を露わにして歩く⁽³³⁾坊主、衣服を汚さないように後がすっかり露わになるほど後を上げる⁽³⁴⁾男、ズボンを鼠蹊部まで捲り上げた⁽³⁵⁾小者にも向けられた。

そして、人々が肌を露出させている理由は、着物の構造上の緩さ⁽³⁶⁾にあると納得する。ボタンや締帯に飾られて身体にぴったりと合う半面、窮屈でもある、ヨーロッパ人の衣服に比べて、日本の衣服はきわめて緩やかなので、容易にそして恥ずることなく、すぐに裸になり⁽³⁷⁾、冬には、男も女も手を身体の中に差し込む⁽³⁸⁾ことができたという。服を人に合わせたヨーロッパと、人を服に合わせたしぐさをもつ日本との対比である。

●色とりどりの衣服

さて、自らを取り巻くほとんどすべて日本人たちが、彩色した衣服を身に着けているという構図も、宣教師たちにとっては異様であった。彩色した衣服を着ることは、軽率で笑うべきことと⁽³⁹⁾考えられていたからである。

色は単に種類や明暗の表現にとどまらず、象徴する感覚を。「我等が明るく陽気と思う白色⁽⁴⁰⁾を、彼等は喪⁽⁴¹⁾と悲しみを表わすものと考え、我等が喪中に身につける黒色⁽⁴²⁾と紫色⁽⁴³⁾を彼等は喜ぶ⁽⁴⁴⁾」といい、黒い衣服を白い糸で縫っても、日本では少しも不適當とは思わない⁽⁴⁵⁾ことに呆れた。

また黒みを帯びた黄色の僧衣を「香染⁽⁴⁶⁾の衣」といい、坊主たちは黄色または緑色の服を着ることを名誉の色として喜んだが、宣教師にとって黄色は派手でいやらしい色⁽⁴⁶⁾と認識されていた。色が象徴する感覚、および認識を形づくるものが真っ向から反対しているようすがみてとれる。

彩色は、染めた糸を織りだした先染めと布地を染色した後染めとに分けられる。衣類の素材には絹⁽⁴⁷⁾、麻⁽⁴⁸⁾、木綿⁽⁴⁹⁾、紙⁽⁵⁰⁾、樹皮⁽⁵¹⁾、獣皮⁽⁵²⁾がみられる。織る工程⁽⁵³⁾がうかが

『日葡辞書』が語る衣の風景

え、多様な名称が並ぶのは絹織物⁽⁵⁴⁾であり、織り節⁽⁵⁵⁾、織り縞⁽⁵⁶⁾、織り模様⁽⁵⁷⁾もさまざま、流通も国内⁽⁵⁸⁾のほか、中国からの輸入品⁽⁵⁹⁾が珍重されていたこともわかる。

染色材料は樹皮⁽⁶⁰⁾・葉⁽⁶¹⁾・花⁽⁶²⁾・実⁽⁶³⁾・根⁽⁶⁴⁾・鉱石⁽⁶⁵⁾など⁽⁶⁶⁾多岐にわたり、染色にたずさわる染物師を「染物屋⁽⁶⁷⁾」と呼び、染色した物の色を「染色⁽⁶⁸⁾」といった⁽⁶⁹⁾。染色⁽⁷⁰⁾の外に、絵⁽⁷¹⁾や模様⁽⁷²⁾を描くもの、刺繡⁽⁷³⁾や金箔⁽⁷⁴⁾、宝石等⁽⁷⁵⁾を縫いつけて装飾したこと、着物の意匠⁽⁷⁶⁾として、区画を設ける「腰明け」「片身変り」「四変り」「八つ変り」もみられた。

さらに、着物の首の部分に別の布地や織物などで作った細長い布切れを付け添えることを「輪⁽⁷⁷⁾をさす」「襟」、着物の裾の継ぎ合わせ布を「裾継」、繕いをしたぼろの着物を「色々衣⁽⁷⁷⁾」といった。

●剥ぎとったままの皮

また、毛皮の使われ方にも度肝を抜かれた。牡鹿から剥ぎとって毛がついたままのものを着たり⁽⁷⁸⁾、身分のある人がその上に坐るため、侍童の帯の後に狐や山犬の皮を吊るして運ばせたり⁽⁷⁹⁾、鞆や馬飾や馬具の飾鉾を使わずに、外側にした虎の皮の「馬衣⁽⁸⁰⁾」を使ったり⁽⁸⁰⁾、毛皮を内側でなく外側に着たり⁽⁸¹⁾、狂気染みたこと⁽⁸²⁾としか思えないものが多々あった。加えて、きわめて巧みではあるものの、染料を用いずに藁の煙だけを用いて着色したり⁽⁸³⁾、武具の彩りに使う⁽⁸⁴⁾など、ヨーロッパ人がみた日本における皮革の扱いは、理解の範疇を超えたものであった。

●足の中程しかない履物

さらに、男たちの足元に目を凝らすと、わずかに足の中程しかない履物⁽⁸⁵⁾を履いているものしかない。足を完全に載せた履物を探すと、坊主と婦人と老人のものばかりである。ヨーロッパでは物笑いになるところが、日本では立派なことだという⁽⁸⁶⁾。あまりに意表を突かれたのか、強調するかのように【われわれの間では足を全部地につけて歩く。日本では、足の半分の履物の上で足の先だけで歩く⁽⁸⁷⁾】と重ねて述べている。

しかし、ヨーロッパ人側の論理だけでなく、日本人側の論理にも言及しているのが履物⁽⁸⁸⁾に関する記述である。【われわれは履物をはいたまま家にはいる。日本ではそれは無礼なことであり、靴は戸口で脱がなければならない⁽⁸⁹⁾】、【ヨーロッパで、われわれの間では、貴人が君主の前に履物を脱いでいくならば、それは狂気の沙汰であろう。日本人は、どんな主人の前にでも、履物をはいたまま出ることは教育のないこととされている⁽⁹⁰⁾】といい、最後に【われわれは帽子をとることによって慇懃を示す。日本人は靴を脱ぐことによってそれを示す⁽⁹¹⁾】と認知するのである。

以上のように、宣教師たちにとって、苦痛になるほど奇異なもの、困惑するものを拾い出すと「ヨーロッパとりわけ修道会員たちの間では、下品で破廉恥なものとされている⁽⁹²⁾」ものに終始する。身体が透けて見えるような薄衣は不面目であり、肌の露出は恥知らずで、彩色された衣服の氾濫は軽薄でしかなく、剥いだままの獣皮は全く狂気染みており、長さが足の中程しかない履物は物笑いの種である。しかし、かつてのように⁽⁹³⁾黒人で低級な国民⁽⁹⁴⁾と一言の下に切り捨てなかったのは、土足で家に入るヨーロッパ人自身の行為が無礼で無教養だと指弾され、それらが「巧みに道理づけられていた⁽⁹⁵⁾」ためである。

3. 日本人の美意識

● 矯めつけて着る

それでは、日本人自身が違和感を持った着方とはどのようなものだろうか。まず、挙げられるのは習わしとは反対の着方である。

着物を裏返しに着ることを「反様に^{かいさま}着^きり物^{もの}を着^きる」、着物の前面右おくみをもう一方の左おくみの上に重ねることを「着^きる物^{もの}を引^ひき違^{ちが}ゆる」、着物あるいは帷子の一方の裾が他方よりも長くなるように着ることを「片前垂^{かたまえだれ}に着^きる」、着物の片方が他方より下がっていると、長くなっているとかを「片下^{かたさが}り」、履物など対で数える物の片方がもう一方と違ってする場合を「片^{かた}ちぐ」、裾が引きずるほどで、足の下に敷かれるような長い着物を踏みつけることを「踏^ふみしだく」、足を包み隠すように、袴の裾を足の下に踏み敷くことを「袴^{はかま}を踏^ふみ含^くむ」といった。

それらに対して、まっすぐに整えてきちんと着ることを「着^きる物^{もの}を矯^ためつ^きけて着^きる」、服装を整えるために着物をなおしたり、引っ張ったりすることを「身繕^{みづくら}ひ」、着物の前側を整えることを「衣紋^{えもん}を刷^{かいつくろ}ふ」といった。

外出などのため、着物を着たり用意したりすることを「支度^{したく}」、外出するために身なりを整えて飾ることを「出立^{いでた}ち⁽⁹⁶⁾」、きちんと着物を身につけることを「出立^{でた}ちます」、きれいできらびやかな着物や服装を「美々^{びび}しい出立^{でた}ち」、主人が立派に服装を整えるように、その着付けを手伝いに行くことを「衣文^{えもん}に参^{まい}る」といった。

立派な着物や武具、その他の飾りを身につけて盛装した人を「厳^{いかめ}しい人^{ひと}⁽⁹⁷⁾」、ようすがよく、ゆったりとした人を「着^き際の良^よい人^{ひと}」、ある着物を立派に上品に着ることを「着^きなす」、四肢の釣り合いがよく、風采が立派で上品な人を「押立^{おした}ての良^よい人^{ひと}」、着物の胸の上にかかる部分を「衣文^{えもん}」、着物を上手く着こなす人を「衣文^{えもん}づ^ききの良^よい人^{ひと}」、見かけの立派に見える者を「身^みなりよ^いいもの」、自分の身や服装、その清楚さなどに心を配ることを「身^みを嗜^{たしな}む⁽⁹⁸⁾」、よく身を整えて飾り、こざっぱりして洗練された人を「花奢^{きゃしゃ}な人」、きち

『日葡辞書』が語る衣の風景

んと晴れやかに着物を着るさまを「ちゃっきと」、似つかわしいことを「さつつべらしい」といった。

すなわち、望ましいのは着物の前側が左右対称であり、適度な長さがあること、ことに胸から上の部分と下の部分との均衡が重要視されていたことがみてとれる。

●美男をする

とはいえ、整えるというのは、及第点であっても好評価ではなかった。

見た目が平凡でなく、趣があって優雅な人を「風流^{ふうりゅう}の良^よい人^{ひと}」、よい匂いのついた着物を「薰衣^{くんえ}⁽⁹⁹⁾」、きらびやかな服装を「綺羅^{きら}を磨^{みが}いた支度^{したく}」、豪華できらびやかな織物で作った衣裳を「綾羅錦^{れうらきんしゅう}繡^{しゅう}」、薄手で軽く柔らかい衣裳を「綺羅^{きら}輕^{けい}裘^{しゅう}」、優美できらびやかな装いをした人を「華^{くわ}美^びた人^{ひと}」、優美なきらびやかな着物を「美服^{びふく}」、立派できらびやかな着物を「鮮衣^{せんえ}」、豪華で贅^{ちんえ}沢な着物を「珍衣^{ちんえ}」、良い着物を着て飾ることを「着^き飾^{かざ}る」、うわべや服装の姿形・外観を「装^{ようそ}ひ」、男も女も同じようにおめかしをし、装いをする^{びなん}ことを「美男をする」、伴をする者たちに、いまだかつてないほど立派に着飾らせて、ということを「伴^{ともな}ふ者^{もの}どもをいつもより引^ひき繕^{つくろ}うて⁽¹⁰⁰⁾」、あちこちと歩き回り、やたらに身体を揺り動かして向きを変え、着物をみせびらかそうとするさまを「びらりしゃり」「びらつく」。

さらに、外面を飾り、見えを張ることの好きな者を「だてな者^{もの}」、常軌を逸し、自分に許された程度以上の勝手気ままをする人を「傾^{かぶ}き者^{もの}」、服装や格好がまるで別の姿に変化して、まねをしたようであったり、とっぴに見えたりするもので、並外れて装いを凝らす女だとか、女のような装いをしてひどく人目をひくような男だとかを指す時に「化^ばけ化^ばけしい」「化^ばけらしい」、奇抜な服装を「逸^{いつ}典^{きょう}な支度^{したく}」、色や模様などが突飛で、その人の人品に釣り合わない着物を着ることを「てばてばしい衣裳^{いしやう}を着る」、行状や服装などが奇異で突飛な人を「ひやうげ者^{もの}」といった。

優美さやきらびやかさは平凡でないことにつながり、面白味を加えた。その延長線上で下に着る物に贅を凝らす⁽¹⁰¹⁾趣向も一般化していた。従来は、羽織裏などを例に近世後期の過差や奢侈の禁令に抵抗した趣向として強調されてきたが、より早い時期に成立したことがしられる。「美男をする」風潮が、無視できないほどの大きな広がりをもせたことにも注目すべきである。ただし、面白味も一歩突出すると「化け化けしい」と悪評価につながった。

●新しい着物と音

着物を新しく裁つ時に行なわれる儀式を「襟祝^{えりいわ}ひ」といったが、新しい着物を着て動く時などにばりばりと音を立てるようすを「ばりめかす」、新しい紙衣が音を立てるようす

を「ごそめかす」、糊をつけてぴんと張った着物をぱりぱりと音を立てさせることを「はりめかす」、着物が擦れ合う時にざわざわと音を立てることを「ざやめく」、素肌に着た粗い着物などがざらざらしてがさつくことを「はしかい」、床にある着物などを足で踏みつけてしわくちゃにすることを「踏みしたく」といった。

新調したものは、初めに独占ではするが、馴染みに時間がかかり、柔らかくて薄くて軽い、あるいは豪華できらびやかという優位性に比して、新しさのみでは別段価値のあるものではなかったといえる。

●古い着物と臭い

古い物が古いゆえに珍重されたかは、着物においては、袈裟を除いて言及がない。

着物に折目や皺ができることを「皺を畳む」、同じ一枚の着物をいつも着ているさまを「着詰め」「衣裳を着通しにする」、着物を常用して傷め損ずることを「着損ずる」、古くなるまで続けて着て常用することを「着古す」、主君とか尊敬すべき人とかがもはや着なくなった古着を「召し下ろし」、奉公人の粗末な着物、慣例として定まっている時期に人に与えられる衣類や財物を「惣物」、主人が召使いに与える着古した着物を「お古」、体の垢が着物やその他の物にくっつくことを「垢づく」、着物などによごれや体の垢のしみができることを「垢染がした」、垢のついた着物を「垢衣」、足で踏みつけた泥のとばっちりを受けることを「泥を踏み被る」、地面の上を着物などを引きずって行くことを「そろ引く」、着物に、ある種の枯れ草・その種子がくっつくことを「さしが取り付く」、ひどく着古して長い間洗濯しない着物のような悪臭を放つことを「しわら臭い」、文書語で「臭衣」、着物についた体の汗や脂肪のしみを取り去ることを「油染を落す」、両手の間でこすりながら着物の垢や汚れを除き去ることを「揉み落とす⁽¹⁰²⁾」、着物が釘にからみついたことを「着る物が釘に引っかかった」、布切れが裂け破れる音を「さっさと」といった。織物がげばだつことを「ぼぼくる」、縫い目のほどけた所を「綻び」、引っ張って綻びさせることを「引き綻ばかす」、着物のどこかが破れて垂れ下がっていることを「びれやうが下がった」、補修布「継切」をあてることを「継ぎをする」、シモ(九州)では「ふせをする」、短くて繕いをした着物を「短褐」、破れた着物を修理して縫い繕うことを「綴る」、絹の着物がひどく古びてしまって洗濯して縫い直すことを「張帽紗」、古びてさんざんに破れ、ひどく修理してある着物を「檻褌」、ぼろぼろの古びた着物を「敝服」、ぼろをまとった貧乏人の身なりや格好を「ぼとぼとしたなり」、見かけや服装が並外れて醜くて、やせこけてぶざまで卑しいことを「異体」、たとえば、夫を亡くした女が化粧⁽¹⁰³⁾もせず、身だしなみもせず、自分自身を粗末に扱ってみすばらしくなるさまを「身をやつす」、やつれて黒くなっていることを「痩せ黒む」といった。

『日葡辞書』が語る衣の風景

着古した着物を象徴したのは臭いである。ぼろを着続けるのは新調できない貧乏さゆえだが、身だしなみもしないことが自分を粗末に扱っているものだという指摘は、美意識につながっている。

●白単ずる

美意識に適わないありさまとは、どのようなものだろうか。

丁寧な支度をするのに対して、手早くさっさと着るさまを「ちんと着る」、身軽な服装を「^{かるじたく}軽支度」、帯を締めただけで袴もはかず、胴服も着ないでいることを「^{なかをび}中帯ばかりで」、着物の着付けが悪く、だらしない格好をしている人のように、俗人が袴をつけないで下着だけであること、あるいは坊主が衣をつけないでいることを「^{びやくえ}白衣でいる」・「^{びやくたん}白単ずる」、人と対面などする際に、病人などが袴をつけないで行儀悪くしていることを「^{をうびやくえ}大白衣」・「^{をうびやくたん}大白単」、髪はばらばらに解け、着物はだらしなくはだけなどして、身なりのみだれているさまを「^{をうわらわ}大童」といった。着物や履物が大きくゆったりしている、あるいは無作法で躰の悪いさまを「^{くつろ}寛ぐ」、婦人の帯の端が下へ垂れているさまを「しゃらしやらと」「しゃらりしゃらりと」、締まりなく緩んで帯や剣などがずっと下の方へぶらさがりるさまを「だらりとしたなり」、がさつで格好の悪い人を「^{ぶたいはい}無帯佩の者」、不恰好で釣合いのとれない、似合わない服装を「^{したく}だばけた支度」、ある人の才能や地位に不釣合いな貧弱なさまを「^{さたう}左道」、そそっかしい、あるいは乱れてだらしがないさまを「ばさらな」、立居振舞が軽はずみでだらしがなく、礼儀正しくない者を「しゃっきやくな^{もの}者」、無作法で、躰が悪く、物事をよく知らず、でたらめをしでかす者を「^{ばかももの}馬鹿者」「^{たわもの}戯け者」、粗野でむさくるしい格好で、見た目にこわさを感じさせるような者を「^{もの}むくつけな者」といった。

これらからすれば、日本人自身が恥ずべきありさまと考えていたのは、だらしない格好であり、まさに下着だけの姿であった。この意味で宣教師たちが厭ったイメージと大差はなかった。

●今昔

宣教師たちは【われわれの間ではほとんど毎年新しい服装や着衣の工夫が案出される。日本ではいつも同じで変わることがない⁽¹⁰⁴⁾】と述べたが、果たして、当時の日本人自身も同じように捉えていただろうか。

萱を舞台にした「^{のういしやう}能衣裳」として命脈を保っているのが、「^{えぼし}烏帽子」「^{なしうちえぼし}梨打烏帽子」「^{えんび}燕尾」「^{しゃもんづきん}沙門頭巾」「^{かづらをび}鬘帯」「^{そばつぎ}側次」「^{はっぴ}法被」「^{まいぎん}舞衣」「^{すいかん}水干」「^{みづごろも}水衣」「^{をうくち}大口」である。

烏帽子は、武士が優美な装いをする際にかぶる「^{をりえぼし}折烏帽子」、式典とか祝祭日とかに着用する木製の「^{かけえぼし}掛烏帽子」のほか、「^{たてえぼし}立烏帽子」「^{ながごゆい}長小結」「^{こゆい}小結ひの烏帽子」「^{えぼし}濃烏帽子」

「風折烏帽子」^{かざをり えぼし}「縁塗」^{へんぬり}の名もみえるが、常用されていたとは言い難い。

昔の人が着用したつばなし帽子と袖の広くて長い着物を「烏帽子袴」^{えぼし かみしも}といった。広くて長い袖のついている着物を「袴」^{かみしも}というが、本来の名称は「素襖」^{すわう}で、他の着物の上に重ねて着る、短い着物を指す。今日ではその代わりに「肩衣」と「袴」を用いる。また昔、今の「肩衣」と同じように着用した裏付きの丈の短い着物を「裏打」^{うらうち}といったとある。こうした記述から、細かに昔と今とを線引きしていることがみてとれる。

●標章するもの

官位を示す標章のついた着物をつけて壮麗豪華にしていることを「衣冠」^{いくわん}、衣服の飾りときらびやかさが見事であったということを「束帯結構にござった」^{そくたいけつこう}、祭りなどの際に改まってつける装飾または衣裳を「装束」^{しょうぞく}といった。

公家の着物として「桂」^{うつき}「小桂」^{こうつき}「裳袴」^{もはかま}「指貫」^{さしぬき}「狩衣」^{かりぎぬ}「水干」^{すいかん}が挙がる。ただし、「直垂」^{ひたたれ}の項に、公家が着用したり武士が鎧の上に着たりする着物。すなわち「直衣」^{なをし}という記述があり、この直垂と直衣の混同からすれば、宣教師たちにとって、公家と武士のどちらか、あるいは、どちらをも見慣れず、熟知していない服装を示していることがわかる。旧来の正装「装束」が消滅したわけではなく、人口に膾炙していなかったのである。

それに比べ、頭に捲頭巾をして赤色の短い帷子を着た職人を弓弦作りの「弦掛」^{つるかけ}「弦差」^{つる}、着物の上に麻帷子をはおり、頭にたくさんの髪飾りをつけて所々方々を遍歴する婦人を「かつら」と示したのは、おそらく目にしたことがあるからであろう。

●当世

「後帯」^{うしろをび}の項には、まだ身体の後ろで紐を結び付けている子どもを「後ろ紐の童」^{うし ひぼ わらべ}⁽¹⁰⁵⁾と呼ぶ片方で、当世ではと注記して、大人になってからも帯を後ろの方で結ぶ結び方をいうとの記載がある。「当世」^{たうせい}⁽¹⁰⁶⁾は現在広く行なわれていることを意味する。

16世紀末、銀と生糸をめぐるアジア海域の交易の拡大に伴って、衣類に特化してみれば、茶の湯の隆盛⁽¹⁰⁷⁾と相俟って、舶来の糸・紐・織物・端布の需要が増し、皮革や武具などの入手も容易になった。武具が即座に最新の様式を取り入れたのは、生死に関わると同時に、権力闘争に直結するからである。しかし、戦場を離れた場においては、男も女も帷子や小袖を着用し、同じように、襷をかけ、懷手をし、あるいは、おめかしをして装った。この「美男をする」とは決して個別・特殊なことではなく、新しくて今に始まる「今めかしい」場が求められていたこと、多くの人々が共感し、共有できる美意識が一連の時代性をもって醸成されたことが背景に考えられる。

4. おわりに

一瞥したところ、色も形も美意識も、日本は、ヨーロッパとまるで反対の、独自の価値体系を展開していた世界であった。

16世紀末の日本において、宣教師たちヨーロッパ人がうけた衝撃の数々は、おそらく、当時の日本人の想像の外であった。目の粗い帷子こそが風を通し、湿潤な夏を快適に過ごせるのであり、袖を捲って裾をはしよるしぐさも必要な動作に従ったもので、露出を目的にしたものではなかった。華やかな小袖も流行になったもので、坊主でも隠居でもない証しともいえる。獣皮も剥いだまま纏うことにより、周囲の目を見張らせ、威圧感を与えるのであり、「足中」を履くことで、泥はねもなく、足運びも簡便になった。これらは至極当たり前の日常風景だったのである。

下着がのぞき、紐が緩んだようなだらしない格好を嫌い、着物の前側は左右対称に、胸から上の部分と下の部分との均衡に配慮して整えるといった着衣の前提において、日本とヨーロッパとの間に径庭があったわけではない。

『日葡辞書』には衣服に対する優美さ・きらびやかさ・面白味という嗜好が認められる。こうした嗜好や美意識は全てが連続と続いた不変のものではなく、一際「今めかしさ」が享受された時期に特徴的なものである。旧来の価値観に縛られることなく、新奇なモノを愛でる。新しさのみに価値を認めたわけでもなく、古さのみを珍重したわけでもないが、装いに関する表と裏との感覚は、ヨーロッパのそれとは別物であった。

16世紀末という時期は、総じて、日本における着衣文化の変化期にあたっていたといえよう。

注

- (1) 1603年に刊行された長崎版日葡辞書《*VOCABVLARIO DA LINGOA DE IAPAM com a declaração em Portugues*》の全訳『邦訳日葡辞書』（土井忠生・森田武・長南実氏編訳、1980年、岩波書店）による。
- (2) イエズス会士記録と『山科家礼記』ほかの記録から中世の日本人の生活を描いたものに、菅原正子氏『日本人の生活文化—暮らし・儀式・行事—』吉川弘文館、2008年がある。
- (3) Alessandro Valignano(1539-1606)。その生涯と第一次日本巡察については、松田毅一氏による「解題Ⅰ・Ⅱ」（松田毅一氏ほか訳『日本巡察記』東洋文庫229、平凡社、1973年所収、以下『日本巡察記』と略記）参照。
- (4) 「日本諸事要録」第2章日本人の他の新奇な風習（『日本巡察記』）。
- (5) 註4参照。
- (6) 「日本諸事要録」第1章日本の風習、性格、その他の記述（『日本巡察記』）。
- (7) 「日本諸事要録」第23章日本における司祭が修院の内外で守るべき方法（『日本巡察記』）。
- (8) 同書の記載に従い、その語彙を「」で示し、ローマ字綴りをルビとした。

- (9) Luis Frois(1532-97)。フロイス、松田毅一・川崎桃太氏訳『日本史』全12巻、中央公論社、1980年。川崎桃太氏『フロイスの見た戦国日本』中央公論新社、2003年
- (10) 岡田章雄氏訳註『大航海時代叢書I—XI』、岩波書店、1965年所収。同書の引用を【】で示した。
- (11) 【年に三回、夏帷子、秋袷、冬着物と衣服を更えた；『日欧文化比較』第1章12項、以下、比較1-12と略記する】。「袷」の項参照。以下、註に関係語彙を列挙する。「布子」「綿子」「厚綿」「拔出」「着重ぬる」「着服るる」「上服」「重服」。
- (12) 比較1-72。
- (13) 比較3-20。
- (14) 【われわれの間では僧は世間を蔑むために絹の服を身に着けない。坊主らはそれができるものはすべて世間に対する大いなる驕慢と虚飾から絹の服を着けて歩く；比較4-8】。
- (15) 比較4-20。
- (16) 【われわれのスカートまたは長い部屋着の縁は少しも欠けていない。日本では帷子と着物は、男のも女のも前の縁が1パルモ(約22cm)も短くなっている；比較1-73】。
- (17) 「裁ち合わせる」「物裁ち」「物裁ち刀」・【ヨーロッパでは衣服はすべて鋏で裁つ。日本ではすべて刃物で裁つ；比較1-53】。「搔板」「針先」「針のみみず」「針の耳を通す」「針目」・【われわれの間では衣類の縫い目をほどこうとする時にナイフを使って縫い目を切る。日本の女性は糸を完全に抜きとってしまう；比較2-68】。「指貫」・【ヨーロッパの女性は指の先に銅の指貫をつけて裁縫をする。日本の女性は、掌に革の細長い切片をつけ、また指の中ほどに紙を少し巻きつけて行なう；比較2-67】。「針手が利く」「針屋」「把針」「把針者」・【ヨーロッパでは男性が裁縫師になる。日本では女性になる；比較2-52】。「縫い立つる」「片色」「裏衣」「裏と表を為合はする」「縫い上ぐる」「縫い合わせる」「縫い含む」「縁をとる」「引きつる」。
- (18) 「茜小袖」「木瓜の小袖」「紅絵の小袖」「落し入れ」「けかけの小袖」「山藍の袖」。
- (19) 「強り帷子」「背摺」「細美」「高宮賀布」。
- (20) 比較1-19。
- (21) 「褌をかく」「下帯」「膚帯」「膚の帯」「手綱」「下紐」「肌着」「下襦」「股引」「膚袴」「脚布」「湯具」。
- (22) 「肌帷子」「湯帷子」「身拭ひ」。
- (23) 【われわれの間で、部屋着を着るような場合には、日本人は帷子の上に袖の無い胴服を着る；比較1-59】。麻製の単の粗目の羽織り着「打掛」のほか、「八徳」「褌襦」「十徳」「袖無」。
- (24) 比較1-15。
- (25) 軽くて短く、袖がなく、男子が他の着物の上に重ねて腰のところで締めて着る着物。
- (26) 【われわれのズボンと皇帝ズボンは絹製で金の笹縁が付いている；比較1-18】。【われわれのズボンまたはズボン下は前が開いている；比較1-17】。「四幅袴」「平切」「裁ちつけ」「伊賀袴」「括袴」「長袴」「つい袴」「練袴」。
- (27) 【ヨーロッパの女性の衣服は前が閉じるようになっていて足から地面までを蔽う；比較2-24】。
- (28) 【ヨーロッパの女性は紐や帯に財布または鍵を付けて歩く。日本の女性は金箔で彩られた薄い絹の紐を何本か締めているが、それに何もぶらさげない；比較2-23】。「平紵の帯」「丸紵の帯」「平づけの帯」「狭織帯」「織帯」「平江帯」「付帯」「こだま帯」「しけの帯」「掛帯」「女児結び」「女結び」「男結び」「真結び」「蜻蛉結び」。
- (29) 【ヨーロッパのマントは袖もなく、色の物もない。日本では着物として着る色のある帷子が同時にマントにも用いられる；比較2-27】。【ヨーロッパの女性は大そう長い黒マントを

- つける。日本の高貴の女性は短い白絹のものを着る；比較 2-26】。
- (30) 【ヨーロッパの女性は頭に白頭巾、または紗を冠る。日本の女性は屑綿で作った綿帽子または白い布の切れをマントの下に冠る；比較 2-8】。【ヨーロッパの女性はマントを着けていても、人々と話をする時にはさらに顔を蔽う。日本の女性は頭からマントをとらなければならない。着けたまま話すのは不作法だからである；比較 2-56】。
- (31) 【われわれの間では女性が素足で歩いたならば、狂人か恥知らずと考えられる；比較 2-20】。「徒^か跣^ちに歩む」「素足^{すあし}で歩む」「脱^ぬぎ捨^すつる」。
- (32) 【ヨーロッパの女性は、その袖が手首まで達する。日本の女性は、腕の半ばまで達する；比較 2-19】。「腕^{うで}を捲^{まく}る」「襷^{たすき}」「玉^{たま}襷^{だすき}」。
- (33) 「褌^{つま}ぐる」「褌^{つま}を掻^かい取^とる」「衣裳^{いしやう}の裾^{すそ}を掻^かい取^とる」「前^{まえ}を張^はる」。
- (34) 【われわれは歩いている時、衣服を汚さないように前を上げる；比較 1-42】。
- (35) 【われわれの間では小姓^{しりから}や貴人^{きりから}が主人の伴をするのに、足の親指一本も現わしてはいけない；比較 1-43】。「尻^{しり}紫^{むら}げ」。
- (36) 【われわれの袖は狭く手首にまで達する。日本人のは緩く、男のも女のも、坊主のも、腕の半ばまでである；比較 1-16】。幼児の脇の開いた袖を「腋^{わき}開^あけの袖^{そで}」、シモ(九州)で「振袖^{ふりそで}」、詩歌語で「鶯^{うぐいす}の袖^{そで}」ということから、脇は開いていなかったことがうかがえる。
- (37) 比較 1-20。「東^{あづま}紫^{むら}げ」「肩^{かた}脱^ぬぎ」・【われわれの間では矢を射る時、射手は服を着けている。日本では弓を射るものは着物を半ば脱いで、一方の腕を露わにしなくてはならない；比較 7-24】。「諸^{もろ}肩^{かた}を脱^ぬいで」「肩^{かた}を押し脱^ぬぐ」「脱^ぬぎ掛^かけをする」・【われわれは手と顔を洗うために、ただ手首を捲り上げるだけである。日本人は同じことをするために、帯から上を脱いで裸になる；比較 1-49】。「腰^{こし}巻^{まき}」「大肌^{おほいで}脱^ぬぎに肌^{いで}脱^ぬぐ」「帯^{おビ}を解^とく」「脱^ぬ却^{きやく}」「着^き更^{あら}ゆる」「取^と袴^{はかま}をする」「股^{もも}立^{たち}を取る」「袴^{はかま}の返^{かえ}股^{もも}立^{たち}を高く取^とる」。
- (38) 【日本人は男も女も、いつでも、ことに冬には、袖を外に垂らし、手を身体の中に差し込む；比較 1-21】。「懷^{ふところ}手^てをする」「抜^{ぬき}入^{いれ}手^てをする」「肘^{ひじ}を張^はる」。
- (39) 比較 1-13。
- (40) 赤子が誕生後二十日か三十日後、結婚後二日か三日後、喪あけなどに白い着物を脱いで、種々の色のついた着物を着ることを「色直^{いろなお}し」といった。『大諸礼集』諸礼集下によれば、妻迎に際して、初日より二日まで男女ともに白い色を着るべきとある。
- (41) 喪服を「色」という。
- (42) 【われわれは喪に黒色を用いる。日本人は白色を用いる；比較 1-41】。
- (43) 黒みを帯びた紫色を「聴^{きこ}色^{いろ}」、婦人用の単皮や手袋を作る紫色の柔らかい革を「御免^{ごめん}」「御免^{ごめん}の革^{かわ}」といい、身分や官位を標識した色名が残存していたことを示す。
- (44) 「日本諸事要録」第 2 章日本人の他の新奇な風習(『日本巡察記』所収)。
- (45) 比較 1-74。
- (46) 比較 4-37。
- (47) 「真綿^{まわた}」「白糸^{しらいと}」「撚糸^{よりいと}」「はくりの糸^{いと}」「練繰^{ねりぐり}」「つけ糸^{いと}」「綿糸^{わたいと}」「唐^{から}紅^{くれなゐ}」「白まがひ」。
- (48) 「麻^{あさ}の苧^お」「縫苧^{ぬいそ}」「はぬい」「苧^おを績^うむ」「紡績^{ほうせき}」「苧^お小筭^{せうさん}」「練麻^{ねりま}」「細引^{ほそびき}」「綵繩^{さいじゆ}」「よま」「苧屑^{おくづ}」「くで」「くで帯^{おび}」「布^ぬ」「麻衣^{あさぎぬ}」「手繰^{たぐり}」「よよみ布^{ぬの}」「白布^{はくふ}」「晒^{あび}」「細布^{ほそぬの}」朝鮮の麻織物「照布^{てりふ}」「麻衣^{あさぎぬ}」「布衣^{ふえ}」「間遠^{まこと}の衣^{ころも}」。
- (49) 「木^き綿^{わた}」「摘^とむ」「塗桶^{ぬりけ}」「一束^{いっそく}」「ぼんぼりと」「兜羅綿^{とろめん}」「茜木綿^{あかねもめん}」。
- (50) 【われわれの間では紙の衣服を着るなどということは、嘲笑され、狂気の沙汰とされるだろう。日本では坊主や多くの王侯が絹の前裄と袖のついた紙の着物を着る；比較 1-58】。「紙^{かみ}縫^{ぬい}り」「紙衣^{かみぎぬ}」「紙子^{かみこ}」「紙袷^{かみぶすま}」。
- (51) 「藕糸^{ぐうし}」「芭蕉布^{ばしやうぬの}」「太布^{たふ}」「竹布^{ちくふ}」「藤布^{ふぢぬの}」「藤衣^{ふぢころも}」「葛袴^{くずはかま}」「菅笠^{すげがさ}」「蓑^{みの}」「さえ」「蒲行纏^{がまはばき}」「編笠^{あみがさ}」「檜^{ひのき}笠^{がさ}」「竹原傘^{たかわらがさ}」。

- (52) 「白氈」^{はくせん}「氈」^{せん}「毛氈」^{もうせん}「座氈」^{ざせん}「麤皮」^{そひ}「粗皮」^{あらかわ}「撓皮」^{いためがわ}「作り革」^{つくかわ}「洗革」^{あらいがわ}「皺皮」^{ひきはだ}「蜃皮」^{いひ}
「厚皮」^{さいひ}「虎皮」^{こひ}「羊皮」^{やうひ}「牛皮」^{ぎゅうひ}「馬皮」^{ばひ}「蛇皮」^{じゃひ}「猿糞」^{ざるなめ}「ぐのめ」^か「唐皮」^{からかわ}。
- (53) 「延ゆる」^へ「綜」^あ「梭」^は「膝」^あ「荒歳」^{あらさ}「歳」^{とし}「綜竹」^{あぜだけ}「綜糸」^{あぜいと}「杵木」^{かせぎ}「踏木」^{ふみぎ}。
- (54) 「織物」^{をりのもの}「細軟」^{さいなん}「すい綿」^{めん}「巻絹」^{まきぎぬ}「小巻」^{こまき}「緋段子」^{ひどんす}「縞子」^{しゆす}「祖」^{あこめ}「厚板」^{あついた}「薄板」^{うすいた}「板の物」^{いたのもの}
「海黄」^{かいき}「玉衣」^{たまぎぬ}「蟬の羽衣」^{せみはごろも}「緞」^{もぢ}「素紗」^{すしや}「素羅」^{すろ}「羅・紗」^{うすもの}「褶」^{しじら}「縮」^{ちぢみ}「錦」^{にしき}「赤地の錦」^{あかぢにしき}
「紺地の錦」^{こんぢにしき}「金地の金欄」^{かねぢきんらん}「花染絹」^{はなそめぎん}「魚竜」^{ぎょりゆう}「縑の衣」^{きぬのえ}。
- (55) 「生絹」^{すすし}「ゆいそ」^{ゆいそ}「ゆいそなし」^{ゆいそなし}「唐ゆひそなし」^{からゆひそなし}「練貫」^{ねりぬき}「練り」^ね「紬」^{つむぎ}「綿の目」^{わため}「精好」^{せいこう}。
- (56) 「織筋」^{をりすぢ}「紅筋」^{くれないすぢ}「小格子」^{こがうし}「縞織」^{しまをり}「紬」^{ぬめ}。
- (57) 「綾」^{あや}「間綯」^{かんどう}「抜白の文」^{ぬきしろのぶん}「波の文を織り付くる」^{なみのぶんをおりつくる}「菖蒲の絹」^{あやめぎぬ}「梅花」^{めいけ}「石畳」^{いしだたみ}「畳段子」^{たたみどんす}。
- (58) 「東絹」^{あづまぎぬ}「加賀絹」^{かがぎぬ}「糸船」^{いとふね}。
- (59) 「綿紬」^{めんぢゆう}「金欄」^{きんらん}「唐錦」^{からにしき}「段子」^{どんす}「巻段子」^{まきどんす}「段金」^{どんきん}「唐綾」^{からあや}「北絹」^{ほつけん}「唐絹」^{からきぬ}「紋紗」^{もんじゃ}「唐織」^{からをり}
「唐衣」^{からころも}「唐装束」^{からしやうぞく}。
- (60) 「梅染」^{うめぞめ}「涅槃」^{くりぞめ}「蘇芳染」^{すわうぞめ}「黄蘗」^{わうへき}。
- (61) 「藍染」^{あいぞめ}「抹藍」^{もみあい}「煮藍」^{にあい}「茹安」^{かりやす}。
- (62) 「紅染」^{べにぞめ}「縹」^{はなだ}。
- (63) 「洗染」^{しぶぞめ}「実紫」^{みむらさき}。
- (64) 「根紫」^{ねむらさき}「茜」^{あかね}。
- (65) 「黄土」^{わうど}「丹」^{たん}「丹砂」^{たんしゃ}。
- (66) 「茶染」^{ちやぞめ}「褐」^{かう}「紺屋墨」^{こんやすみ}「ご墨」^{ごすみ}「ご」^ご。
- (67) 「染殿」^{ぞめどの}「青屋」^{あをや}「紺屋」^{こんや}「紺撞」^{こんこう}。
- (68) 「木色」^{きいろ}「花色」^{はないろ}「山吹色」^{やまぶきいろ}「桔梗色」^{ききやういろ}「葉色」^{はいろ}「柳色」^{やなぎいろ}「栗色」^{くりいろ}「栗梅」^{くりうめ}「榧色」^{かやいろ}「棕実色」^{むくのみいろ}
「檜皮色」^{ひわだいろ}「朽葉色」^{くちばいろ}「熟み色」^{うるいろ}「鶺鴒」^{ひわ}「山鳩色」^{やまばといろ}「飴色」^{あめいろ}「藍色」^{あいろ}「紺」^{こん}「水色」^{みづいろ}「空色」^{そらいろ}「瑠璃色」^{るりいろ}
「赤色」^{いろ}「赤色」^{あかいろ}「生臘脂」^{しやうえんぢ}「黄色」^{きいろ}「かう色」^{いろ}「青茶」^{あをちや}「黄茶」^{きちや}「媚茶」^{こびちや}「枯茶」^{からちや}「土器色」^{かわらけいろ}「薄色」^{うすいろ}
「薄彩色」^{うすざいしき}。色の濃淡を指すものとして「薄青」^{うすあを}「薄茶」^{うすぢや}「薄黒い」^{うすぐろ}「萌黄」^{もえぎ}「薄萌黄」^{うすもえぎ}「濃い萌黄」^{こいもえぎ}「浅黄」^{あさぎ}「薄浅黄」^{うすあさぎ}「濃い浅黄」^{こいあさぎ}「柿」^{かき}「薄柿」^{うすかき}「濃い柿」^{こいかき}「紅」^{べに}「濃い紅」^{こいべに}「紅梅」^{こうばい}「薄紅梅」^{うすこうばい}「紅葉」^{もみぢ}「薄紅葉」^{うすもみぢ}「紫」^{むらさき}「薄紫」^{うすむらさき}「濃い紫」^{こむらさき}「薄墨色」^{うすすみいろ}「濃い墨染」^{こいすみぞめ}がある。
これらの濃淡は本来襲を構成する色でもあったが、「紅葉襲」のみ記載されている。
- (69) 『日葡辞書』には赤い色の表記が多い。たとえば「間綯」の説明に、赤と白の糸で織り出した花や木の葉等の織模様。抜白の文に同じとあるが、吉田光邦ほか監修『原色染織大辞典』(淡交社、1977年)によれば、間道は東南アジア産の縞、抜白は経糸が紫・緯糸が白の練緯を指すとされる。『日葡辞書』の記述は、赤の範疇が広いことをうかがわせる。また、間綯については、他のものと混同しているか、具象的な織模様・間綯から、縞・間道へと移る過程を示すと考えられる。
- (70) 「括し」^{くく}「ばうし括し」^{あをぐく}「青括し」^{めゆい・めいゆい}「目結」^く「鹿の子」^{かこ}「一つ交ぜ」^{ひとま}「たて交ぜ」^ま「染め分くる」^{そめわ}「染め返す」^{かえ}。
- (71) 「上絵」^{うわえ}「下絵」^{したえ}「かすり(霞)」^{つじ}「辻が花」^{はな}「洲浜」^{すわま}「洲流し」^{すなが}「滋目結」^{しげめゆい}「はわきもの」^す「摺り」^{すり}
「花摺衣」^{はなすりころも}「忍摺」^{しのぶすり}「藍摺」^{あいすり}。
- (72) 「文」^{もん}「小紋」^{こもん}「紋」^{もん}「大紋」^{だいもん}「花尽くし」^{はなづくし}「秋の野」^{あきのの}「唐草」^{からくさ}「唐菱」^{からひし}「唐子の絵」^{からこのえ}「獅子に牡丹」^{ししにぼたん}
「三引両」^{みつひきりやう}「鱗形」^{うろこがた}「五の目」^{ごのめ}「蜘蛛手」^{くもで}「篋撓形」^{けつたうがた}「輪鼓形」^{りんこがた}「檜垣」^{ひがき}「竜文」^{りゆうもん}「枳形」^{きがた}
「巴」^{ともえ}「鞆絵の丸」^{たもえのまる}「輪宝」^{りんぼう}「雲形」^{くもがた}「虹形」^{にじがた}「橘形」^{たちばながた}「木瓜」^{もっかう}「粒桐」^{つぶぎよう}「亀甲」^{きっこう}。
- (73) 「縹」^{ぬいもの}「縫箔」^{ぬいはく}「浮織」^{うけをり}。
- (74) 「金箔で濃む」^{きんぱくで}「銀箔」^{ぎんぱく}「箔屋」^{しろうばく}「箔屋」^{はくや}「沃懸」^{いつかけ}「けかけ」^{げかけ}「銀糸金帳をつなぐ」^{ぎんしきんちやうをつなぐ}。
- (75) 「衣裳に数多の珠玉を縫い付けたり」^{いしやうにあまたしゆぎよくをぬいつけたり}「小鉤」^{こはづ}。
- (76) 丸山伸彦氏は『江戸モードの誕生—文様の流行とスター絵師』(角川選書434、2008年)において、肖像画や現存する遺品を基に、桃山期の意匠の特徴は、規矩性の強いもので、男

女どちらかに固有の様式ではなく、男女間で共有されていたものだとする。さらに性差を表示してきた衣服形式が小袖に統一されたことにより、17世紀になると文様が性差を表示する主たる役割を担って、女性の小袖に偏在してダイナミックに展開したと意義づけた。

- (77) 【われわれの間では綴布はきわめて下等なものである。日本は貴人が全部綴布でできている着物または胴服を大いに尊重する；比較 1-52】。ぼろのという『日葡辞書』の形容は、日本人が評したものだけでなく、ヨーロッパ人が見たままの独自のものといえよう。
- (78) 比較 1-68。「夏毛^{なつげ}の行^{むかばき}簪^{びんざん}」。
- (79) 比較 14-37。「敷皮^{しきがわ}」「引敷^{ひしき}」。
- (80) 比較 8-16。「垢取り」・【(ヨーロッパでは)女性のために騾馬の背の腰掛の中に座蒲団を置く。日本では、高貴の女性のために馬の鞍の上に白い敷布を置く；比較 2-50】。
- (81) 比較 1-24。「裘^{かわごしも}」「革衣^{かわぎぬ}」「狐裘^{こきゅう}」「鹿裘^{ろくきゅう}」「羊裘^{やうきゅう}」「袖細^{そでぼそ}」「革袴^{かわばかま}」。
- (82) 比較 1-68。比較 14-37。
- (83) 比較 14-50。「白草^{しらくわ}」「濃い煙^{ふすべ}」「巻煙^{まきふすべ}」「薄煙^{うすふすべ}」「柑子煙^{かうじふすべ}」「黄草^き」「藍草^{あいかわ}」「菖蒲革^{しょうぶかわ}」。
- (84) 【われわれの甲冑は全て鋼鉄でできている。彼らは角または革の薄片を縫糸で縫い合わせたものである；比較 7-28】・「卯の花緞^{うのはなどうし}」「緋緞^{ひをどし}」「赤草緞^{あかがわをどし}」「黒草緞^{くろかわをどし}」「紫裾濃^{むらさきすそご}」「匂肩^{におい}」「小桜緞^{こざくらをどし}」「片白^{かたしろ}」。【インドではカンバラを異教徒やモーロ人が団扇として使っている。日本人はそれを兜の周りの蔓として使う；比較 7-44】・「赤熊^{あしな}」「赤頭^{あしな}」「白頭^{あしな}」。
- (85) 「足中^{あしなか}」「足中木履^{あしなかばくり}」。
- (86) 比較 1-70。「緒太^{おと}」。
- (87) 比較 1-71。
- (88) 「草^{さう}」「鞋^{あい}」「靴^{わらぢ}」「尻切^{しきり}」「武者草鞋^{むしやわらぢ}」「足駄^{あしだ}」「木履^{ぼくり}」・【われわれの間では雨の時には長靴か普通の履物を履く。日本では裸足で歩くか、木製の靴を履き、手に棒をもつ；比較 1-65】。「下駄^{げだ}」「深沓^{ふかぐつ}」「鴨沓^{かもぐつ}」「雪沓^{ゆきぐつ}」「沓を踏む^{くつをふ}」「単皮^{たび}」「革単皮^{かわたび}」・【われわれの間では半靴、長靴および靴には靴底またはあとから付ける中敷革がある。日本の足袋は靴底がなく、すべての革が続いている；比較 1-69】。「巻煙^{まきふすべ}の単皮^{たび}」「揉単皮^{もみたび}」「貫^{つらぬき}」・【われわれの間では履物は堅牢で厚い革で作る。日本では足袋が手袋のような革で作られる；比較 1-66】。「鼻高^{びかう}」「刺単皮^{さしたび}」「水単皮^{みづたび}」・【日本では俗人の足袋は黒色または淡黄色である。坊主らと高貴の女性^あのものは木綿製で白い；比較 4-40】。
- (89) 比較 1-48。「穿き上ぐる^は」「履脱^あ」「草履取り」。
- (90) 比較 1-47。
- (91) 比較 1-31。
- (92) 「東インド管区とその統轄に関する諸事の要録」第 15 章日本のレジデンシアについて(高橋裕史氏訳『東インド巡察記』東洋文庫 734、平凡社、2005 年所収、以下『東インド巡察記』と略記)。
- (93) 布教長フランシスコ・カブラル Francisco Cabral(1533-1609)の態度に関するヴァリニャーノの記述による。「解題Ⅱ」(『日本巡察記』)
- (94) 「東インド管区とその統轄に関する諸事の要録」第 2 章当管区の人種、王国、習慣および言語の多様性について(『東インド巡察記』)の中でも、シナと日本は例外としながら、管区の大要は〔黒色人種〕〔アリストテレスが述べているように、先天的に他人に奉仕をすべく生まれてきた人々〕〔惨めで強欲〕〔甚だしく悪臭に染まった不道德な輩〕〔大変な虚言家〕〔邪悪な生活による良心の荒廃者〕と断じている。
- (95) 註 4 参照。
- (96) 「暗着^{はれぎ}」「褌^けの服^{ふく}」「褌^けの衣^{ころも}」「打眠衣^{ためんごろも}」「平衣^{へいえ}」「小袴^{こばかま}」。
- (97) 武具をまとう際、鎧をつけていない武士を「素肌武者^{すはだむしや}」・【われわれの間では完全に武装具を着けなければ戦に赴くこととは見えない。日本では武装したというには、首に首当を

- 着けただけで十分である；比較 7-33】。【われわれの間では武装具を着ける時、その下に厚い布のものを着なければならぬ。日本人は武装具を着ける時は、生まれた時のままの赤裸になる；比較 7-32】。武具一式をぬかりなく着用することを「まっくろに鎧ふ」「籠手小具足を指し固めた」、鎧を人に着せてということを「鎧を取って打ち着せて」といい、着物や鎧を自分の身につけ、あるいはうちかけて羽織ることを「着下す」、着用した鎧が身体にびたりとついて具合よくなるように、鎧を強く揺り動かすことを「鎧突きをする」といった。【われわれの武装具はきわめて重い。日本人のものはとても軽い；比較 7-27】。
- (98) 【われわれの間では保管のために衣服をたたむのに表を内側に裏を外側にする。日本人は表を外側に裏を内側にする；比較 1-29】。「掛竿」「衣桁」「衣裳を風はむる」「簾台」「熨斗」「樟腦を焼く」「竜腦」「梅花」。
- (99) 【われわれはたくさんの安息香を直接に火の上に投げ込む。日本人は熱い灰の上にきわめて薄い銀の小薄片を置き、その上に小麦 2,3 粒ほど沈香の薄片を置く；比較 14-56】。「薰衣香」「沈をとむる」「丁子袋」「端焦がしたる扇」「枕箱」。
- (100) 【ヨーロッパでは従者が主人の衣服を着て随行することはない。日本の殿は威勢のために衣服と鍍金した刀とを従者に貸与する；比較 14-65】。また揃いの仕着せを着て、馬とか輿とかの先に立って歩く二人の召使を「番小者」という。
- (101) 【われわれの間では良い衣服を上に着て、良くない衣服を下に着る。日本人は良いの下に、良くないものを上に着る；比較 1-22】。【われわれの間ではいつでも衣服の地は裏地よりも良質である。日本では貴人の胸服は、可能ならば、その生地より良い裏地を付ける；比較 1-23】。
- (102) 【われわれは衣服を手で擦って洗う。日本では足で蹴るようにして洗う；比較 1-60】。「びためかす」「洗濯する」「洗濯人」。
- (103) 化粧もかざりもしてない顔を「只顔」「素顔」、白粉を「白粉」「天瓜粉」「唐の土」「胡粉」・【ヨーロッパでは、顔の化粧品や美顔料がはっきりと見えるようでは不手際とされている。日本の女性は白粉を重ねれば重ねるほど一層優美だと思っている；比較 2-15】。【ヨーロッパでは白粉 1 箱あれば 1 国全部の要を充たすに足りる。日本にはそれを積んだシナ人のソマ船が多数渡来するが、それでもまだ足りない；比較 2-66】。「口紅」「末摘花」「頬紅」「容色婬妍」「妖艶」「美粧」「姝艶優長」「角赤」「玉手箱」「つま袋」「表刺」「畳紙」・【われわれは手巾や紙をポケットか袖に入れて歩く。日本人はすべて衣服の胸部に差入れて歩く。そしてどっさり入れればそれだけ品格が高まる；比較 1-61】。「包み」「錦囊」「腰袋」「燧袋」・【袋はヨーロッパでは金銭を携行するのに使われる。日本では貴族や兵士のそれは香料や薬品、火打石を入れるのに使われる；比較 1-63】。「巾着」「金袋」「宝蔵」・【われわれの間ではポケットを使う。日本人は帯にぶら下げた小さな袋を使う；比較 1-62】。
- (104) 比較 1-14。
- (105) 【われわれの間では赤児は唯一本の布片を締め、前に結んでいる。日本の幼児は着物にたくさんの紐があり、すべてを後ろで結ぶ；比較 3-5】。九歳頃、帯を後ろで結ぶ習わしをやることを「紐落し」・「帯直し」といった。
- (106) 『日葡辞書』にはないが、当該期に流行した甲冑を当世具足、以前のものを昔具足と称した。
- (107) 【われわれは宝石や金、銀の片を宝物とする。日本人は古い釜や古いヒビ割れた陶器、土製の器等を宝物とする；比較 11-9】。